

ほかの七十七人は三部屋に雑居です。その日から、主人の苦労がまた始まりました。男手はたった六人（二人死亡）。あとは女、子どもばかり。自分の金を出したくない人ばかりです。家族だけならどんなに楽かと何度思ったかしれません。

責任感の強い主人は、毎日、慣れぬ土地で、あちこち金策に歩き、調達しては皆の食糧を確保してききました。

寒さは零下三十度を越し、着る物もありません。またまた中国人からもらった敷布団の綿を着物の間にに入れて冬の着物にし、薄くした敷布団の上に“メザシ”のように、頭と足を六つ並べて寝ます。かけ布団はありません。毛布が一枚あるだけ。

零下三十五度の極寒でも生きられるものです。朝、毛布の上は吐く息

で凍っています。牡丹江を出て一度も風呂に入っていないません。シラミは手でなでて落とすほどです。中国人は、衣服を石の上に置いて、石で叩くのが、朝の日課のようでした。

皆、発疹チフスにかかりました。私も発病し、気がつくとい枚しかない毛布をかけられています。慌てて三男にかけてやります。また：と同じことを繰り返して主人に叱られました。

「子どもはあきらめろ。母親は一人しかいないんだぞ」と（男の人はすごいナ）。うれしいよりも、腹が立ちました。（主人の気持ちも分からずに）

十二月末に、過労と発疹チフスで主人が倒れてしまいました。

皆さんは、やっと自分のお金で生活されるようになりました。今まで、

お世話した私たちには知らん顔です。私たちには、何にもありません。毎朝、八台くらいずつ、凍死した人の遺体か、衣服をはがされ“丸太”のように積み上げられ、捨てに行きます。（コダマ公園の池だと聞かされました）

長女が牡丹江で教えて頂いた担任の先生に出会い、問われるままに実情をお話したところ、「造花を作って売っているから一緒に作りましょう」と誘われ、その日から通うことになりました。初めはお粗末な物だったでしょうが、毎日三十円ずつ頂いてきました。

十円で封筒一杯のお米を買って、主人と三男の食糧にしました。あと十円で薪を、残り十円で塩などを買います。野菜などは、拾ってきます。オカラも食べないで捨ててあります。